

巻頭言

王様の子

日本ロゴセラピスト協会会長 勝田 茅生

「王様の子」という昔話をご紹介します。

昔あるところに王様が住んでいました。その町では皆働かず、たくさんの方が貧困にあえいでいました。この町の人は皆不機嫌で文句ばかり言ってましたが、支配者のことは大変に恐れていました。

ある日のこと、王様はとても重要なことを伝えるからと言って、すべての住人を広場に集めさせました。人々は恐るおそる王様の方に目を向けて、好奇心を持ってその重要な知らせを聞こうとしました。

王様は言いました。「私は誰にも気づかれぬように、お前たちの子どもの一人を私の子どもと取り換えたことがある。その子を大切に扱うように。その子が酷い扱いを受けたなら、私はその者に罰を与えることにする！」そう言うと王様は城に戻って行きました。

町の住人はどの子が王様の子だか分からなかったので、皆その罰を恐れしました。それで人々はこの町の子どもを一人ひとり、あたかもそれが王様の子であるかのように育てたのです。

何年か経ちました。子どもたちは成長し自分たちでも子どもを持つようになりました。年を取った王様はこの町が良い方へ発展していくのを満足して見ていました。貧しく汚かった町は清潔に磨かれ、誰も知らない人のない有名な素晴らしい町になりました。病院も、学校も、大きな図書館もできました。住民は満足して幸せでした。どうしてでしょう？ それはすべての住民がこの町の子どもたちを愛情をもって、しっかり教育したからなのです。というのも、誰が王様の子どもなのか分からなかったので、この町ではどの子も皆王様の子であるかのように育てられたからなのです（作者不明）。

この町に住んでいる人々は皆貧しかったのに、どうして働こうとしなかったのでしょうか？ 彼らは自分たちの生活が苦しいことを政治家のせいにして文句を言